Sir William Empson 論
—なぜ今、エンプソンなのか—

深　山　美　樹

クリストファー・リックス (Christopher Ricks) は、"William Empson was at once a great man and a great Englishman" と称えている (Ricks, 1993: 540)。現代イギリスのジャック・デリダ (Jacques Derrida) 研究の第一人者として知られているクリストファー・ノリス(Christopher Norris) はウィリアム・エンプソン (William Empson, 1906-84)、ポール・ド・マン (Paul de Man)、デリダの共通性を論じながら、エンプソンの創造的才能 (genius) を高く評価している (Norris, 524)。私は、今もなお、彼の「不思議の国のアリス—牧童としての子供—」 (Empson, 1935) を読んだ時の、あの衝撃を忘れることができない。それは、子供向けの「アリス」 が、エンプソンによって精神分析的に、科学的に、歴史的に、政治学的にさまざまな角度より分析され、ガリバー (*Gulliver's Travels*, 1726) と比較され、キリストの受難に例えられ、ワーズワス (William Wordsworth) やコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge)、そしてダーウィン (Charles Darwin) の『種の起源』(*On the Origin of Species*, 1859) までも引き合いに出し、多様な方向性をもった豊かな洞察にあふれる批評で読者を、世界を、驚かせたのだ。難解すぎるわけではないが、かといって、単純に理解できるものでもない。もどかしいのである。エンプソンの ambiguous な表現のもどかしさゆえに、だれもが魅了されるのだと思う。

24 歳で発表した『曖昧の七つの型』が、エンプソンの名前を一躍有名にした。その後も現代文学批評の最も輝かしい業績を残した彼であるが、New Criticism の衰退した今日の日本において、彼の知名度は決して高いものではない。せいぜいイギリスの批評家、詩人、そして『牧歌の諸変型』の著者として紹介されるくらいである。しかし、現在なお、イギリスにお

けるエンプソンの評価は、日本と全く異なり、私が入手した下記の書評の一部を見てもわかるようにとても高いものだ。まず、はじめに、ケビン・ジャクソン (Kevin Jackson) の論評を紹介したい。

> Empson devoted his entire writing life to criticism. A considerable limitation, no doubt, but, within his self-defined limits, like a Renaissance magus inside his cabbalistic circle, Empson summoned marvels and worked miracles. Almost anyone who has read his precocious masterpieces, *Seven Types of Ambiguity* (a book that revolutionized literary criticism in the English-speaking world, and famously grew from an undergraduate's essay) or *Some Versions of Pastoral,* can attest to their power to enthral and inspire: you put them down feeling slightly giddy, with your view of the world subtly yet permanently changed. If the claim that Empson was the outstanding English critic of the 20th century doesn't cut much ice today, let's clarify that assertion by saying that he was, simply, one of its outstanding English writers, and certainly fit to be mentioned in the same breath as Coleridge, Hazlitt, Matthew Arnold, or even Johnson. (Jackson)

私も同感である。エンプソンの研究を進めるにあたって、どうしても彼が扱っている文学作品のベースが求められる。エンプソンを研究する事で、英文学の巨匠といわれる作品との出会いがある。そのため私は日々多くの知識を与えられ、勇気づけられているのだ。エンプソンによって私の人生は大きく変わった。ミルトン (John Milton)、マーベル (Andrew Marvell)、コールリッジ、ドライデン (John Dryden)、ポープ (Alexander Pope) に興味を抱くようになれたのもエンプソンのおかげだといえよう。

この春オックスフォードから 700 ページにわたる伝記が出版された。これは、ジョン・ハッフェンデン (John Haffenden) が 25 年の歳月をかけたエンプソン研究の集大成といえる著作で、エンプソン研究者にとってはこの上もない貴重な 1 冊である。本書は、これまでの伝記J.H.ウィルズ

(J.H.Wills, Jr.) と ローマ・ジル (Roma Gill) の 2 書に比べても、画期的な作品といえよう。さらに英米文壇の反響も大きく、この本に関して多くの書評がでている。まず、現代のイギリス英文学の重鎮フランク・カーモード (Frank Kermode) による論評をまず紹介しよう。

> Empson himself was a pugnacious believer in the relevance of biography to the study of literature. As Haffenden remarks, he always sought to 'situate the work in the context of the life', and the lives of artists had a special importance because of their status as outsiders, challengers of convention — condemned, in so far as they were doing the work they were born for, to some measure of social isolation. As he wrote in one of what seems to be a remarkably large body of surviving letters, many of them of great biographical interest, 'it is a very good thing for a poet . . . to be saying something which is considered very shocking at the time.' Such a poet, he believed, would be doing his ethical and political duty: 'To become morally independent of one's formative society . . . is the grandest theme of all literature, because it is the only means of moral progress, the establishment of some higher ethical concept.' (Kermode, 2005)

ハッフェンデンは、現存する莫大な数のエンプソンの手紙を利用して、世界大戦という厳しい時代に生きたエンプソンの経歴 (Biography) をとても興味深くかつ、ていねいに言及している。エンプソンを生み出した社会史を覗いてみると、『曖昧の七つの型』は、ウォール街の恐慌とオーストリアおよびドイツの財政破綻の間に出版された。このとき、イギリスの失業者は約200万人にものぼっていた。そして『牧歌の諸変型』が世に出たのはイタリアがエチオピアに侵攻した年であり、イギリスでは挙国一致内閣が再選された年であった。(イーグルトン, 1996: 264) エンプソンの、その時代に翻弄され、苦悩した姿を、また、彼がいかに勉強したか、24 歳で名声をわが手におさめたその真髄 (genius) を推し量るヒントをこの伝記は教え

てくれる。

エンプソンの批評は、イギリス系 New Criticism であって、クレアンス・ブルックス (Cleanth Brooks) に代表されるアメリカ系 New Criticism とは違っていた。"The 'use' [biography] is all for our better understanding of the work,···" (Empson, 1984: xii) とエンプソン自身が言っているように、エンプソンは、常々、文学研究にとっての経歴 (Biography) の重要性を強調している。カーモードもそのことに言及している。リックスも、マーベル、ドライデン、フィールディング (Henry Fielding)、イェイツ (William Butler Yeats)、T.S.エリオット (Thomas Stearns Eliot)、ジョイス (James Joyce) に関する *Using Biography* (Empson, 1984) での諸論文は、死を間近にしたエンプソンの人生を知る上での重要な作品だと述べている (Rickes, 1985)。なかでも私は、マーベル論に注目している。なぜなら、*Using Biography* だけでも 'Natural Magic and Populism in Marvell's Poetry,' 'Other People's Views,' 'The Marriage of Marvell,' の 3 論文を執筆し、『牧歌の諸変型』にも、「マーベルの庭 (Marvell's Garden)」と題した一章があるように、エンプソンのマーベルへの言及がひと際目立つからである。マーベルは、「庭 (The Garden, 1681) 」のような自然美を讃える形而上派特有の機知と古典主義的な抑制のきいた抒情詩や、「アイルランドよりのクロムウェル帰還に寄せるホラティウスふうオード (An Horatian Ode upon Cromwell's Return from Ireland, 1650) 」のような政治詩を生み出した詩人だけでなく、1657 年にオリバー・クロムウェル (Oliver Cromwell) の知遇を得て、共和政府ラテン語秘書官のミルトンを補佐し、1660 年の王政復古後も国会に席を置き、政治家として、ミルトンを弁護して助命に力をかした。私は、マーベルの勇敢な行動に魅了されたのか、それとも彼の助けがなかったならばあのミルトンの荘重な叙事詩『失楽園』(*Paradise Lost,* 1667) が生み出されなかったからなのか、いずれにしろマーベルの生涯に強く魅かれる。恐らく、歴史学者、クリストファー・ヒル (Christopher Hill) の "Society and Andrew Marvell" (Hill, 1990) のイギリス革命 (English Revolution) とピューリタニズム (Puritanism) の研究が私に大きな手助けをしてくれるだろう。しかし、エン

プソンは、マーベルに大きな興味を示した理由を「マーベルの庭」の中で、次のように語っている。「この詩「庭」の要点は、意識的な状態と無意識の状態、知恵の直感的方式と知的方式とを対照させるところにある。しかしこういう区分は決してなされていないし、またおそらく区分のしようもないものであった。作者の考えは彼の用いた比喩に内在しているからだ。こういう事態は、きわめて極東的なものがある。ぼくがこの詩を扱ってみる気になったのは、リチャード博士が最近孟子のある哲学的な議論(『孟子の精神論』, 1931)を検討したのに触発されたからだ。」(エンプソン, 1982: 133) 仏教の瞑想へのエンプソンの言及が、創作事情に気付かないイギリスの批評家を当惑させた。シェフィールド大学のフランシス・ベリー (Francis Berry) 教授が、エンプソンに捧げた詩 "The Genial Sage" で、"Emeritus, you'll be active, Marvell next?" (Gill, 211) と語られるほど、エンプソンのマーベルへの特別な深い思いは、周知の事実であったようだ。

ジェイソン・ハーディング (Jason Harding) は、ハッフェンデンの著作を手際よく紹介し、"Haffenden's informative chapter 'The Trial of Tokyo'" が福原麟太郎の敬虔なエンプソン像[1]を破壊し、特にエンプソンが、1931 年 8 月から 34 年 7 月にかけて東京文理科大学 (現・筑波大学) の英文学講師を勤めた日本での 3 年間に大きな特長があると論評している。(Harding) エンプソンは、来日初日から酔いつぶれて駅舎の窓をよじのぼって警察に逮捕され、翌日の『朝日新聞』には、"Once caught, it was not a burglar but a university professor! (捕らえてみれば、犯人は、強盗でなく、大学教授!)" と報道された。当時、礼節を重んじた軍国主義の日本で、若い外国人教師が日本の学生に英文学を教授することは不運なことであった (Haffenden, 287-8)。ましてや、来日早々から騒動を起こしたエンプソンに対する日本での風当たりはとても強かった。エンプソンも、近い将来起こり得る日本とイギリスの戦争のため、日本人女性と交際を警告するイギリス当局を全く無視し、「ハル」との関係を続け、大学において日本の学生との友好という本来の目的をも軽視するようになっていった。いったんイギリスに帰国し、1937 年北京の国立大学講師として中国に赴任したが、1937 年日本

の侵略による慮溝橋事件が勃発、1939 年には第二次大戦のため帰国する。エンプソンがもっともよく詩を書いた 33 歳になるまでを、ハッフェンデンは Volume 1 に描き出している。だが、"Seven types of torment" の見出しからもわかるようにエンプソンのゴシック的な事件をハーディングは、少々強調しすぎて、エンプソンの貴族的で (aristocratic)、聡明な (intellectual) 姿が見えてこないのが残念である。彼は、最後に次のようにまとめている。

> One hopes that the conclusion of this work offers a more critical evaluation of the imaginative reach of Empson's wayward genius; his painstaking biographer has clearly earned the right to it. (Harding)

エンプソンの日本での 3 年間は、彼の詩を研究する上でも大いに重要である。「ハル」と「ハタケヤマ」と名乗る 2 人の女性との出会いが、彼の詩に大きく関わってくるからである。エンプソンの最も有名な詩の一つである " 'Aubade'—Hours before dawn we were woken by the quake." は、ある事件 (スキャンダル) をほのめかし、恋人「ハル」とのアバンチュールが明るみに出る。地震によって別れ別れになったエンプソンの恋人についてお互いを気遣う甘美な詩ではなく、地震の不安とともに広がるエンプソンの心の動揺を詠っていると私は解釈する。ハッフェンデンが言うように、エンプソンがあからさまに私生活を語った数少ない詩のひとつ (one of the few poems that is directly revealing about his private life) である。カーモードは、"And he had a chaste relationship with an interesting woman who wrote poetry in English" (Kermode, 2005) と「ハル」を純潔な女性だと述べているが、"The thing was that being woken he would bawl／And finding her not in earshot he would know." の he について、ハッフェンデンは、「ハル」の夫か、父親だと推測している。しかし、当時の日本の住宅事情からしても、夫ならば同じ部屋に寝ているはずなので、「ハル」不在に気が付かずに大騒ぎをするのは、別の部屋にいる父親だと想像できる。「ハル」の家族は、横浜に住んでいた。「ハル」は、東京でドイツ大使の世話役 (nursemaid) として働い

ていた。派手さはないが、かわいらしい女性であった。(A pretty girl of slight build) 髪にパーマをあてた、当時としては、とてもファッショナブルでおしゃれな女性だったようだ (Haffenden, 326)。"I tired saying Half an Hour to pay this call" エンプソンの言い訳が、地震の不安とともにどんどん膨らんでいく。"Aubade" のスタイル (style) は、five-line stanzaと three-line stanza から構成され、前者の rhyme は aabab, 後者は aba と完全な定型詩である。エンプソンは自由詩 (free verse) を嫌い、伝統的な英詩の定型 (form) をかたくなに守りつづけた。"It seemed the best thing to be up and go. The heart of standing is you cannot fly" のリフレインが不安な彼の心をどんどん大きくする。イギリスと日本は、この 10 年以内に必ず戦争になる。結婚などできない。エンプソンの不安は、情勢の悪化したヨーロッパまで広がっていくのである。

"Aubade" の評価は高い。ハミルトン (Ian Hamilton) は、"for all his intellectual dandyism, he (Empson) was—or, at his best, could be—a rather moving and plain—speaking, lyric poet" (Hamilton, 152) と論じ、"Missing dates," "Aubade," "Let it go" を同じスタイルの詩としてあげている。この詩はエンプソンの同時代のなかでもっとも優れたものだと言えよう。

> The best because it has plenty of story ; because it fuses, as no other poem does so richly, the two principle preoccupations of bold commitment and of shrewd good sense; because it marries the love-poems and the war-poems; and because it deserves the praise which Empson gave to Swinburne's best poem, 'The Leper' (Gill, 198)

リックス、カーモードは、揃って批評以上にエンプソンの *The Complete Poems* (Empson, 2000) を高く評価している。中でもこの詩集に収録された 77 編の詩のうち"The Fool," "The Shadow," "The Small Bird to the Big" の 3 点の詩の末尾に C. HATAKEYAMA, [Trans. W.E.] と付記されているが、ハッフェンデンの注をみても "Sadly, almost nothing can be discovered about

'C.Hatakeyama,'" と書かれているだけだ。(Empson, 2000: 322) "The Small Bird to the Big" の詩については、エンプソン自身が *The Gathering Storm* (1940) の中で「私は、ミス・ハタケヤマから彼女の再録許可を得られないでいる。私は彼女が自ら英語で書いたものの仕上げをしたにすぎない。[原詩にない] 比喩や思想はいっさい加えてないはずだ」と語っている。この女性は何者なのだろうか？しかし *TLS* の 2003 年 7 月 18 日号で、彼女はロビンソン (Robinson) により "Empson's secret muse" として、その全容が明らかにされた (Robinson)。この日本人女性は、宮城県中田町出身の畠山千代子（1902 - 1982）で、彼女は、幼いときに事故で右手を失ったにもかかわらず、宮城学院を優秀な成績で卒業し、弘前女学校などで英語教師を務めた。日本に滞在していた若きエンプソンに自作の英詩の添削を依頼し、その作品はエンプソンを瞠目させたのだ。何度か手紙のやりとりの後、エンプソンは上京した彼女自身と一度会い、彼の方で何度か連絡をとろうと試みたが、彼女の方が住所も知らせずに "very sort of shrinking (身を引くような感じ)" となり、第二次世界大戦に向けての時代の潮流とも重なり、エンプソンと千代子との文通は途絶えてしまった。生涯を独身で通した千代子はなぜか作品を世に出すこともなく、無名のまま世を去った。千代子は何に萎縮してしまったのだろう。それは、ケンブリッジ (Cambridge) 大卒 28 歳独身で気鋭のイギリス人研究者エンプソン自身ではなかったのか。"The Small Bird to the Big" の中で "Fly up and away, large hawk, / To the eternal day of the abyss," と高く舞い上がっていこうとする "large hawk (偉大な鷹)" と "Your eyes that are our terror (われわれを恐れさせるあなたの目) …So that I must hide shuddering under inadequate twigs (小枝の影におののきながらいるあわれな小鳥)" に、エンプソンと千代子自身の姿が投影されているのではないだろうか。

さて、ハッフェンデンの伝記の内容に入っていきたいと思う。ケント (Kent) のパブリックスクール (Prep - school) からウィンチェスター・カレッジ (Winchester College, Cambridge) へとエンプソンの fine flower of particular education には、数学と物理の別名ともいわれる純粋数学と量子力学がエン

プソンの資質 (genius) に流れている。幼少の頃、『マクベス』を読んでいたエンプソンを母親は強く叱ったという (Haffenden, 61)。「男子たるもの女々しい文学など読むべきでない」ということなのか、彼女はそれから家にあるすべての通俗劇 (melodrama) の本を捨ててしまった。エンプソン 9 歳のとき父の死により、プレ・スクールに入学するまでのほとんどこの厳しい母に育てられる。エンプソンの母親像は、"To an Old Lady" の月の女王なのだ (エンプソンの母は、自分がエイリアン (alien) に例えられることを不服とし、この詩のモデルは、エンプソンの祖母だと主張した) (Haffenden, 64)。母の努力のかいあって、エンプソンのケントと ウィンチェスターにおける数学の成績は抜群で、当然のことながら、ケンブリッジの数学科に進むことになる。しかし、ここでエンプソンは人生の最大の転機を迎える。それは、I.A.リチャーズ (Ivor Armstrong Richards) との出会いである。ハッフェンデンの伝記の大部分は、エンプソンとリチャーズとの関係に終始しているといってもよい。リチャーズを語らずしてエンプソンを語ることはできない。エンプソンが、日本や中国にきたのもリチャーズの指示によるものである。『文芸批評の原理』(*Principles of literary Criticism,* 1924)、『修辞学』(*The Philosophy of Rhetoric,* 1936)、『意味の意味』(*The Meaning of Meaning,* 1923)、『コールリッジ論』(*Coleridge on Imagination,* 1934) など、多くのリチャーズの著作の重要性は、今もなお変わらない。ケンブリッジの知的エリート、イギリス最古の英文科の設立者であるリチャーズの研究こそ、私にとってエンプソンを知る大きな手がかりとなるだろう。

ジェーコブ・ブロノスキィ (Jacob Bronowski)、バートランド・ラッセル (Bertrand Russell)、ジョーン・メイナード・ケインズ (John Maynard Keynes)、ハンフリー・ジェニングス (Humphrey Jennigs)、G.E. ムーア (George Edward Moore)、C.K. オグデン (Charles Kay Ogden) など世界的なエリート集団の中でエンプソンは、青春時代を送っている。学生時代、エンプソンは、かなり破天荒なところがあり、周囲の人々から彼のマナーの悪さやだらしなさ (scruffiness) を指摘され、冷たくされた。こんな時も、彼の級友で

あるブロノスキィ、ジェニングスは、エンプソンの側にたち彼を賞賛している。なかでもリチャーズの賞賛が一際大きかった。この伝記によると大学時代のエンプソンは、ほとんど講義には出席しなかった。例えば 2 週間にわたる T.S. エリオットの講義にも、たった一度しか出席しなかったのだが、リチャーズの講義だけは、その例外で、きちんと出ていた。もちろん両者の見解が一致しないときもあった。エンプソンのフロイト (Sigmund Freud) への関心を、リチャーズは共有しなかった (Richards did not share Empson's interest in Freud)。それでも彼らの親交は、最後まで続いた (Kermode, 2005)。とにかくリチャーズを師として、エンプソンの人生は、数学から文学へと大きく変わっていく。この転機が、エンプソンにとって、あるいはイギリス、いや、世界にとって、プラスであったのか、マイナスであったのかは、大きな問題である。

カーモードは、もしエンプソンとリチャーズ がケンブリッジ大学の英文学科のスタッフとしてイギリスに留まり活躍していたら英文学研究に大きく貢献し得たであろうと嘆いている (Kermode, 2003: 340)。この論文によるとリチャーズは、歴史 (History) と倫理学 (Moral Science) を研究してから、ラッセル、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン (Ludwing Wittgenstein)、ムーア、観念論哲学者 (ideal philosopher) の J.M.E. マクタガード (J. M. E. McTaggart) などへの哲学の分野に手を伸ばし、心理学者のワォード (James Ward) に師事することになる。そして神経病学の権威シェリングトン (Charles Scott Sherrington) の指導がなければ、『文学批評の原理』が生まれることはなかったとカーモードは結んでいる。

この伝記の中で私にとって興味深かったのは、やはり "The Trial of Tokyo" で、エンプソンが日本の大学で英文学を教えても意味がないとか、日本の英文学科の学生が英文学を楽しむ (enjoy) ことは、不可能だと言いきっている点である (Haffenden, 289)。母親への手紙をみても、どうやらエンプソンは日本があまり好きではなかったような印象を受ける。その理由としてハッフェンデンは、次の 2 つの理由を挙げている。1 つは、日本の学生はエンプソンの授業をただ静かに聞いているだけで、自分の意見を発

表するという意欲が感じられなかったということ。2つめの理由は、迫り来る日本のファシズム (Fascism) に対して大学の教授たちが何の抵抗も示すことなく、ただ時勢に流されていく卑劣な態度に不快感を覚えたこと。この時、エンプソンは、一日も早く日本を離れたい切なる胸の内を母親に伝えている。この伝記を通して知りえたことだが、エンプソンは、詩や文学批評以上に、オグデンの "Basic English" の中国や日本への普及に強い関心と大きな期待を寄せていた。ここで "Basic English" について、論じる余裕はないが、私には、現在の日本の英語教育にとって重要な問題提起をしていると思われる。リチャーズ、オグデン、エンプソンの "Communication language" という発想は傾聴に値する。

また、カーモードは、エンプソンのすべてを次のように語っている。

> Part of his eccentricity must be an interest, unshared by most literary people, in the greatest imaginative achievements of the modern mind, which have all been in the sciences. That is, he must try to persuade the ignorant of the importance of modern science; moral progress depends on it. Not to have some understanding of physics and biology is to get the whole world picture wrong and to fail to understand the true, perhaps tragic situation of the individual in a world transformed by this knowledge. (Kermode, 2005)

機会あるごとに、エンプソン自身も科学の重要性を力説しているが、科学主義 (scientism) こそが、エンプソン批評の原点である。詩は、科学であるとか、文学は科学であるというエンプソンの科学 (science) の意味は、まさに意味論的分析が必要で、なぜそれが、道徳とか倫理につながるのか、科学が重要なのか、それは大きな問題であると思う。しかし、私にとってエンプソンの魅力はここにある。科学の倫理性とは何か、もっとも今日的な問題と言えよう。

最後に、エンプソンの作品を中心として、その現代的意味を考えてみた

い。『曖昧の七つの型』は、あまりにも有名な作品で、今もなお、英詩分析のバイブルとして世界の英文学者から愛されている。しかし最近は、言語学の立場からも注目を浴びている。私は今、別の立場からこの作品に注目している。つまり、20 世紀における分析哲学の流れであるムーアから発した 2 つの影響が互いに無関係に進展したのかどうかを検討する必要があるように思われる。ムーア、ラッセル、ウィトゲンシュタインは命題を分析的に扱おうする論理学的な立場をとり、一方リチャーズとエンプソンは、ムーアの倫理学を受け入れながらも命題を分析的に扱おうとする文学的な立場をとる。この 2 つの流れはケンブリッジという極めて狭い世界の中で堅く結びついている。ラッセルにとってもリチャーズにとっても、ムーアの存在は大きかった。ラッセルの分析哲学がムーアの手法にほかならないとすれば、エンプソンの分析批評もまた、ムーアの方法論を受け入れたひとつの流れともいえる。リチャーズにとってムーアの存在は大きく、エンプソンにとっても、またムーアの影響を無視することはできない。オースティン (John Langshaw Austin)、クワイン (Willard Van Orman Quine) の分析哲学に与えた『曖昧の七つの型』の影響は、測り知れないものがある。

> For Empson, poetry is a concentrated form of ordinary language and he has, perhaps, more in common with Austin than with either I. A. Richards or New Criticism. Whereas Austin holds that a sharpened perception of language will lead to sharper perception of reality, Empson argues that a moderate step forwards in the understanding of language would do a great deal to improve literary criticism. (Macey, 113)

『牧歌の諸変型』をエンプソンの最高の作品であると考えている批評家も多い。例えば、ケネス・バーク (Kenneth Burke) は次のように高く評価する。

> William Empson's *Some Versions of Pastoral* is unquestionably one of

the keenest, most independent, and most imaginative books of criticism that have come out of contemporary England. Since Eliot has been encumbered with so much troublesome extra baggage in recent years, his volume for us is lessened and the three most fertile works on literature since The Sacred Wood are I. A. Richards' *Principles of Literary Criticism,* Caroline Spurgeon's *Shakespeare's Imagery,* and this new book by the author of *Seven Types of Ambiguity.*

The step from *Seven Types of Ambiguity* to *Some Versions of Pastoral* is considerable. Empson is still, unfortunately, inclined to self-indulgence, as he permits himself wide vagaries. But presumably that is his method—so the reader, eager to get good things where he can, will not stickle at it. He will permit Empson his latitude, particularly since it seems to be a necessary condition for the writing. He will take what he gets, and will proceed to delve there. (Burke, 422)

『牧歌の諸変型』は、フロイトと精神分析学の立場から見ても『曖昧の七つの型』よりは、はるかに成功した作品といえよう。この原稿は、ほとんど全部日本で書き上げ、日本で発表したものだ (福原, 378)。[2]『牧歌の諸変型』の 7 つの章は、要するに牧歌詩の 7 つの変型に等しい。最初の章は、プロレタリア文学を論じていて、虚構上のプロレタリアを牧歌の主人公である田舎の若者の栄光を与えられた姿を考え、その考え方の矛盾を手がかりにして牧歌というカテゴリーのアイロニーを明らかにしている。牧歌の他の 6 つの変型は、ダブル・プロットをもった劇におけるサブ・プロット、貴族制を問題にしているシェイクスピアのソネット、マーベルの「庭」、『失楽園』、ジョン・ゲイ (John Gay) の『乞食オペラ』(*Beggar's Opera,* 1724)、『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) をそれぞれ論じている。第 1 章を別にしてそれ以後は大体において年代順に英文学をたどりながら、数世紀の間に牧歌的観念がいろいろ形を変えて繰り返されてきたその変化のあとを明らかにしている。そしてルイス・キャロ

ル (Lewis Carroll) においては、性以前の状態への退行として牧歌的観念が用いられている。中心的な章は、「アリス論」で、おそらく文学をフロイト的に分析したもっとも優れた論文で、この本の頂点に達する。シェイクスピアの「ソネット 94 番」の分析も、また、この本の見せ場であって、エンプソンの一行ずつ分析していく綿密な読みは誰も模倣することはできない。キリスト教とマキヴェリズムという全くかけ離れた思想とこのソネットの関係をさぐり、 W. H. 氏の社会的地位を推測し、あらゆる語の可能な意味を解釈し、結論としてその詩の複雑なアイロニーを詳述しているが、これは、驚くべき批評だといえる。年代順に英文学をたどるのは、勿論、社会の進行を反映したものでエンプソンは牧歌の各変種の社会的起源と機能を社会学的に解明している。数多くのパストラル論の中でも、牧歌というカテゴリーを人為的仮構による単純崇拝であるとするエンプソンの理論は、今もなお研究に値する。

The Structure of Complex Words (1951) は、文学作品における単語の研究としては世界最高の作品にランクされており、師のリチャーズに捧げられている。エンプソン自身もまた、この著書を誇りに思っている。『曖昧の七つの型』の欠点を補う文芸批評集としてもやはり注目すべき作品である。ハッフェンデンは、 Appendix 1 の "Theories of Value" は文学の価値を論じているエンプソンの貴重な論文の 1 つだと言っている。『失楽園』はあまりにも有名な作品で、ダンテ (Dante Alighieri) の『神曲』(*Divina Commedia,* 1304-7) と比較してみても、エンプソンのサタン (Satan) に対する構想力 (imagination) は驚くばかりで、サタンと神との問題は、永遠に新しい文学のテーマであるといえよう。

Empson offers rather patronizing praise to the unorthodox Romantics in the opening chapter— Blake and Shelley particularly—and implies that he has even more to say. On Satan he looks closely at the famous speeches of Book 1 and claims that while there do indeed stir in the reader a feeling of identification with, even admiration for, courage in defeat they also operate

at a more complex level. Satan and his crew are enduring and battling with relativist uncertainty gratuitously imposed by God. (Bradford, 152)

共和政に託したあらゆる望みがことごとく消え去った時、ミルトンはそれを知らずにサタンの側におかれ、客観的には否定的価値を表像する悪に肯定的価値を与えたのだというエンプソンの議論は、彼一流のアイロニーというべきであろうか。つまり、サタンは、この詩の他のいかなる登場人物、行為あるいは特徴に比べても比べ物にならないほど、ミルトンのかたく信じていたもの、つまり英雄的な行動力を体現しているとエンプソンは考える。ミルトンのサタンは、道徳的存在として彼の神よりもはるかに優れていると不屈の反逆者の魅力を称える。キリスト教の教義体系に対する哲学上の議論は、エンプソンの場合死ぬまで変らないのである。

エンプソンが亡くなってからも、多くのエンプソンの作品が出版される。1937 年 8 月、エンプソンが 3 年間の北京の国立大学講師として任命された時が、彼の新たなオリエンタル・アドベンチャー (Oriental adventure) の始まりとなった。同年 7 月盧溝橋事件の勃発により、日本が中国を侵略した。エンプソンがシベリア鉄道経由で現地に到着した時、行くべきところに仕事がなくなっていた。同じ状態でリチャードも妻と北京にいた。エンプソンは、一切を投げ出して、それでも朗らかに、この苦境を耐え忍んだ。エンプソンは、この頃を振り返り、“the savage life and the flues and the bomb” (Kermode, 2005) と呼んでいる。しかし、苦境の中の同僚たちとのキャンプ生活は、楽しいものだった。移動教室となったが、教えることもまた彼に喜びを与えた。こんな幸せを感じていた時期にエンプソンは、*The Royal Beast and other Works* (1988) を執筆した。その中でも “The Royal Beast” は、悲しく終わりのない、とても巧妙でかつ魅惑的な哲学上の伝説を描いたものだ。アクロイド (Peter Ackroyd) は、この物語に高い評価を与えている (Ackroyd, 201)。*Essays on Shakespeare* (1986) は、難解なシェイクスピア論であまり批評の対象にならないのが残念である。私がもっとも注目している作品は、*Argufying* (1988) と *The Strengths of Shakespeare's Shrew* (1996)

でこの両者の中にエンプソンのすべてが隠されていると思う。エンプソン文学の総決算ともいうべきこの2 冊の著書には、道理 (rational) とヒューマニスト (humanist) としてのエンプソンの主張が脈々と伝えられている。知性と経験と誠実、それがエンプソン文学のすべてであるといえよう。最後にケアリー (John Carey) は、エンプソンの晩年を振り返って "Empson always seems to have been happier with ideas than people. (エンプソンは、人間との付き合いよりも、観念との付き合っている時の方が、幸せそうに見えた)" (Carey, 56) と綴っているが、エンプソン自身はよく次のように語っていた。

> "There is nothing better for a man, than that he should eat and drink, and make his soul enjoy good in his labour." (Empson, 1988: 643)

註

1　英国から赴任したエンプソンの様子を福原麟太郎は「1930年代」『福原麟太郎著作集10』(1969) の中で多く言及し、「ある英文学教室の沿革」(『ある英文学教室の100年』大修館書店, 1978) においては、次のように伝えている。エンプソン氏は、ケイムブリッヂ大学の出身で I.A.リチャーズ教授の弟子で、批評家としては『曖昧の七典型』という名著があり、詩人としてT.S.エリオットのケイムブリッヂに於ける勢力を一掃したといわれるほど、すぐれた詩才を持っていた。要するに天才であった。やはり 25 歳であった。

　彼は、白墨まみれになって教えた。3 年つとめて帰国するとき、彼の詩歌に対する熱情と、それに並んだ非常に冷徹尖鋭な分析的批評方法とに影響された学生達は甚だ多かった (151)。

2　福原麟太郎氏は、上の引用に続いて「彼が日本にいる間に書いた文学批評は、のち纏められて、『牧歌の諸変形』(Some Versions of Pastoral) となって出版

せられた」(151) と伝えている。

Works Cited

Ackroyd, Peter. *The Collection.* Chatto & Windus, 2001.

Bradford, Richard. *John Milton.* Routledge, 2001.

Burke, Kenneth. *The Philosophy of Literary Form.* Louisiana State University Press, 1967.

Carey, John. "Burnt-Out Case." *Sunday Times* (November 30, 1986) repr. in John Haffenden ed. *Argufing—Essays on Literature and Culture.* University of Iowa Press, 1988.

Constable, John ed. *Critical Essays on William Empson* (*Critical Thought, Vol 3*), Scolar Press, 1993.

Empson, William. *Using Biography.* Harvard University Press, 1984.

---. John Haffenden ed. *Argufing—Essays on Literature and Culture.* University of Iowa Press, 1988.

---. John Haffenden ed. *The Complete Poems.* Penguin, 2000.

Gill, Roma. *William Empson — The Man and his Work.* Routledge and Kegan Paul, 1974.

Haffenden, John. *William Empson—Volume1:Among the Mandarins.* Oxford University Press, 2005.

Hamilton, Ian. *Against Oblivion, Some Lives of the Twentieth - Century Poets.* Viking, 2002.

Harding, Jason. "Seven types of torment," *The Times Literary Supplement* (*TLS*). (July 1, 2005)

Jackson, Kevin. "Beyond Criticism," *The Sunday Times on Books* (May 1, 2005)

Kermode, Frank. "The Savage Life," *London Review of Books* (May19, 2005)

---. "The Cambridge Connection" in *Pieces of Mind,* Farrar Straus & Giroux, 2003.

Macey, David. *The Penguin Dictionary of Critical Theory.* Penguin Books, 2000.

Norris, Christopher. "Some Versions of Rhetoric ; Empson and de Man," in Constable ed., *op. cit.*

Ricks, Christopher. "William Empson." (*The Proceeding of the British Academy, Vol 71*)

repr. in Constable ed. *op. cit.*

---."It's great to change your mind" *London Review of Books* (February 7, 1985)

Robinson, Peter. "Empson and the secret muse," *TLS* (July 18, 2003) Wills, J.H. Jr. *William Empson.* Columbia, 1969.

テリー・イーグルトン、大橋洋一、鈴木聡、黒瀬恭子、道家英穂、岩崎徹訳『批評の政治学』東京、平凡社、1996年。

ウィリアム・エンプソン、柴田稔彦訳『牧歌の諸変型』東京、研究社、1982年。

福原麟太郎「1930年代」、『福原麟太郎著作集10』東京、研究社、1969年。

Bibliography

Empson, William. *Seven Types of Ambiguity,* 1930; New Directions, 1966 : 岩崎宗治訳『曖昧の七つの型』東京、研究社，1980年.

---. *Some Versions of Pastoral,* 1935; 3rd ed., Chatto & Windus, 1986.

---. *The Gathering Storm,* Faber & Faber, 1940.

---. *The Structure of Complex Words,* 1951; Harvard University Press, 1989.

---. David, B. Pirie ed. *Essays on Shakespeare,* Cambridge University Press, 1986.

---. John Haffenden ed. *Argufing—Essays on Literature and Culture,* University of Iowa Press, 1988.

---. John Haffenden ed. *The Royal Beast and other Works,* University of Iowa Press, 1988.

---. John Haffenden ed. *The Strengths of Shakespeare's Shrew : Essays, Memoirs, and Reviews*, Sheffield Academic Press, 1996.

Haffenden, John. *William Empson—Volume1: Among the Mandarins*, Oxford University Press, 2005.

Hill, Christopher. *Puritanism and Revolution,* Penguin, 1990.